

## 車窓

佐谷戸明穂

「プールに行こう」

父はそう言って、車を家の前に停めて私たちを呼んだ  
ショッピングセンターの服屋に水着が並ぶ頃

我が家では「泳ぎたい」が口癖になっていた

8月には花火が上がる川沿いを下る

川は瞬きを繰り返し、やわらかな風は頬と手を撫でた  
白く、くつきりとした雲が浮かんでいた

車内では、父と私だけが起きていた

景色を目に焼き付けようとしていた 父の頭に雲が見えた

来年には自由にプールに行けないと知っていた

恋心を教えてくれた大学生を思い浮かべながら、隣で眠る弟の横顔を眺めて  
いた

「楽しい？」と問いかける父に、笑顔で頷いた

私はまだ少女

頭上にはやわらかな雲が広がっていた